

古典語彙の指導について

一 調査と実験報告一

江口正弘

古典の授業で語句について指導する時、この語は一体どれくらいの頻度をもつものであろうか。指導要領の指導事項には「基本的な語句」という言葉が用いられているが、一体どこまでを基本的と考えるべきであろうか。などという素朴な疑問に直面する事である。ある特定の作品における語の頻度ならば、総索引などによれば一応の見当がつく訳だが、古典学習において生徒が履習する語の頻度、換言すれば古典学習における生徒の語彙力の基準となるべき語の頻度、となると使用教科書によって調査されたものでなければならぬ。小稿はこのような観点から以下記すような二種類の「古典乙Ⅰ・乙Ⅱ」の教科書における形容詞と形容動詞の頻度を調査したものと、更にそれらの語句の理解度を調べた、そのレポートである。

(I)

次の表は、古典乙Ⅰ及び乙Ⅱの古文教科書に用いられている形容詞、及び形容動詞の語及びその頻度について調査したものである。調査したテキストは、角川書店 古典乙Ⅰ及び乙Ⅱ、明治書院 古典乙Ⅰ及び乙Ⅱの4種である。

(表1)

(形容詞) 見出し語	角川		明治		計	見出し語	角川		明治		計
	乙Ⅰ	乙Ⅱ	乙Ⅰ	乙Ⅱ			乙Ⅰ	乙Ⅱ	乙Ⅰ	乙Ⅱ	
あいぎょうなし			1		1	あつし(暑)		2			2
あいなし	4	2	2	4	12	あなづらはし	1				1
あかし(赤)	3	2	1	1	7	あやなし			1	1	2
あかし(明)		5	1	2	8	あまし			1		1
あきたし(飽)		1			1	あへなし				1	2
あさし		2		3	5	あやし	10	10	19	23	62
あさまし	4	4	7	6	21	あやふし				1	1
あざれがまし				1	1	あらげなし				1	1
あし	6	11	4	6	27	あらし(荒)	1	2	1	2	6
あだあだし				1	1	あらたし(新)		1		1	2
あたらし(借)		1		1	2	あらまし				1	1
あたらし(新)				1	1	あらまほし		1			1
あちきなし	2	2	1	2	7	ありがたし	1	1		3	5
あつかはし(暑)		1			1	あわただし		1	1	1	3
あつし(熱)		2		1	3	あらあらし			1	1	2

見出し語	角川		明治		計	見出し語	角川		明治		計
	乙I	乙II	乙I	乙II			乙I	乙II	乙I	乙II	
あをし	2	1	1		4	うらさびし		1			1
あやふし		1	2	1	4	うらなし (うらもなし)	1	1	1		3
いぎたなし	1				1	うらめし	1	1	2	6	10
いそがし		2	1	1	4	うるさし				4	4
いたいたし	1				1	うるはし	1	4		2	7
いたし	6	15	5	13	39	うたがはし			1		1
いたはし	1	1		3	5	うひうひし			1	1	2
いたりがたし			1		1	うまし			1		1
いちぢるし		1			1	うれし	4	13	12	8	37
いつともなし		1			1	うらやまし			3	1	4
いときなし	1				1	えがたし		1			1
いとし		1	1		2	えうなし	1		1		2
いとどし		1			1	おさへがたし	1				1
いとほし	2	3	2	4	11	おそし	7	2	3		12
いとまなし		1			1	おそれおほし				1	1
いなびがたし			1		1	おそろし	4	8	10	4	26
いはけなし	1			2	3	おだし(穂)		1			1
いはむかたなし	1	1		4	6	おどろおどろし	2	3	2	3	10
いふかぎりなし		1			1	おなじ	16	14	7	8	45
いふかたなし		1		4	5	おびただし	1			1	2
いふかひなし	3	1	3	7	14	おほけなし				1	1
いぶせし		1			1	おほし	23	25	12	22	82
いまいまし	1			2	3	おほし(思)	4	1	4	1	10
いまめかし	1	1		1	3	おぼつかなし	1	3	2	6	12
いみじ	36	20	41	39	136	おほめかし				1	1
いやし	4	2	2	3	11	おとなおとなし				1	1
うし	2	8	5	12	27	おとなし			1		1
うしろめたし	1	1		2	4	おもし	2	4	2	1	9
うすし	1	3	2	1	7	おもしろし	7	8	3	10	28
うつつなし			1		1	おもだたし				1	1
うたてし			1		1	おもひえがたし		1			1
うたがひなし		1		2	3	おもひすてがたし	1		1		2
うちすてがたし	1				1	かうばし		1		1	2
うつくし	6	3	11	1	21	かぎりなし	6	3	7	5	21
うとし	1				1	かくれなし	1			3	4
うとまし		1	1	5	7	かしがまし	1	1	1	2	5
うもれいたし		1		1	2	かしこし	7	3	4	10	24
うらがなし	1		1		2	かそけし	1				1

見出し語	角川		明治		計
	乙	Ⅱ	乙	Ⅱ	
かたし(難)	5		2	2	9
かたし(固)	1	5		2	8
かたじけなし		1	1	5	7
かたはらいたし	1	1	1	4	7
かだまし(奸)		1			1
かどかどし		2		1	3
かなし	12	14	18	19	63
かひなし	1	5	1		7
かよはし		1		2	3
からし	1		3	1	5
かるし	1				1
かるがるし		1			1
かるがろし		1			1
かろし		2		1	3
かまびすし			1		1
きこつなし	1				1
きたなし	3		1	1	5
きびし	1				1
きよし	2	1		1	4
くさし				1	1
くすし	1	1			2
くだくだし		2		1	3
くちがこし				1	1
くちをし	7	7	11	6	31
くはし		3	1	1	5
くまぐまし				1	1
くまなし	2	2		1	5
くもりなし		1			1
くやし		1	1		2
くらし	5	2	3	1	11
くらべくるし		1			1
くるし	4	6	4	5	19
くろし	1	1	1	2	5
けおそろし				1	1
けうとし	1			1	2
けけし				1	1
けし		1		3	4
けだかし				3	3

見出し語	角川		明治		計
	乙	Ⅱ	乙	Ⅱ	
けどほし				2	2
けちかし		2		2	4
げにげにし	1		1		2
けぶかし				1	1
けやけし			1		1
こぐらし				1	1
こちあし			1		1
こころあわたし	1	1			2
こころうし	3	4	3	5	15
こころぐるし	1	5		7	13
こころさわがし			1	1	2
こころすごし				1	1
こころづきなし	1	1		1	3
こころつよし	1		1	1	3
こころなし	1	2	2	1	6
こころにくし			3	3	6
こころはづかし		1		1	2
こころふかし	1	2		2	5
こころぼそし	7	6	5	10	28
こころもとなし	11	2	5	1	19
こころやすし		2		1	3
こころよわし				1	1
こころさかし			1		1
こころわかし					1
こし	1	3	4	1	15
こだかし(木高)	1				1
こちたし	2		2	1	5
こちなし		1			1
ことあたらし				1	1
ことおほし(言多)		1			1
ことごとし	2	1	1	2	6
ことたかし	1				1
ことになし	1				1
こはし				1	1
こひし	8	6	5	6	25
こぶかし(木深)		1		2	3
こめかし				1	1
こめがたし		1			1

見出し語	角川		明治		計	見出し語	角川		明治		計
	乙	イ	乙	イ			乙	イ	乙	イ	
こよなし	1	10		2	13	そこはかとなし	1	1		2	4
さいかくらし (才覚)			1		1	そうなし (註)			1		1
さうなし			1		1	たよりなし			1		1
さうごうし		1	2	4	7	たかし	9	1	8	6	24
さかし	2			3	5	たぎたぎし		1			1
さし (狹)		1			1	たぐひなし		2		1	3
さだまりがたし		1			1	たけし	3	1	3		7
さだめなし	1	2	1	1	5	たちはなれがたし	1				1
さびし	1				1	たはぶれにくし		1			1
さまあし			1		1	たふとし (たっとし)	2	3	3	1	9
さまよし		2			2	たへがたし		2	1	5	8
さやけし				1	1	たのし		1			1
さむけし	1				1	たとしへなし				1	1
さむし	2	6	3	2	13	たとへむかたなし				1	1
さがりがたし	2		1		3	たのもし	2	2	2	5	11
さりげなし			1	1	2	たやすし	2		2		4
さわがし				1	1	たゆし		1			1
しげし	3	5	1	2	11	たよわし		1			1
したし	2		1	2	5	たのもしげなし		1			1
しどけなし	1	2		1	4	ただし			2		2
しのびがたし				3	3	たたはし			1		1
じやうずめかし		1		1	2	たちはなれにくし				1	1
しるし		2	1	3	6	たどたどし			1		1
しろし	12	6	11	4	33	たくまし			1		1
しほらし			1		1	ちかし	20	10	9	19	58
すきずきし		3		1	4	ちひさし	5	4	7	2	18
すくなし		3	1	3	7	つきづきし	1	2	1	1	5
すげなし		1			1	つきなし		1		2	3
すごし	2		1	1	4	つくしがたし				1	1
すさまじ	2	3	8	1	14	つつまし		2		2	4
すずし	3	4	1	2	10	つめたし	1				1
すてがたし	1	2	1	1	5	つゆけし		2		4	6
すべなし		1	1		2	つよし	2	2			4
すみうし		1			1	つらし		5	1	5	11
せばし		1	2		3	つれなし		2	4	2	8
ぜひもなし		2	1	1	4	つたなし			1		1
せんかたなし	1		1	4	6	つゆしげし			1		1
せんなし			2		2	とどめがたし			1		1

見出し語	角川		明治		計
	乙	イ	乙	イ	
ところせし	1		1	1	3
とし	4	1	4	5	14
とほし	9	6	6	5	26
ときじ(時)			1		1
とほし			2		2
ながし	4	9	6	6	25
ながながし	1				1
なげかし			1	1	2
なごりなし		1		1	2
なごりをし	1				1
なさけなし	3	2			5
なさけぶかし	1				1
なし	70	84	51	66	271
なつかし	3	3	3	4	13
なほなほし				1	1
なにとなし		2			2
なだかし				1	1
なまくらし	1				1
なまかたくなし				1	1
なまめかし	1	1	2	1	5
なめし	1				1
なまなまし		1			1
なやまし		1		1	2
なんなし	1	1			2
ならびなし			1		1
なれなれし				1	1
にくし		2	3	4	9
にげなし		1			1
になし	1			1	2
ぬるし	1				1
ねたし	5	1	3		9
ねぶたし			1		1
のがれがたし	1				1
のどけし		1	1		2
はかばかし		1		4	5
はかなし	4	7	9	15	35
はかりがたし				1	1
はげし		1	1	1	3

見出し語	角川		明治		計
	乙	イ	乙	イ	
はしげやし		1			1
はしたなし		1		4	5
はづかし		4	1	7	12
はなはだし		2			2
はやし	5	2	1	1	9
はらあし			1		1
はらひがたし		1			1
はらだたし	1		1		2
ひがひがし	1	1			2
ひくし	1	1			2
ひさし	9	12	15	6	42
ひとげなし	1		1	1	3
ひとし	2	2	5		9
ひとびとし			2		2
ひとわろし		1		2	3
ひなまし		2		2	4
ひろし		2	3		5
びんなし				1	1
ふるめかし				1	1
ふかし	7	18	1	11	37
ふせきがたし		1			1
ふるし	1	4	3	2	10
ふとし			1		1
ほいなし	1		1	2	4
ほし		1			1
ほとほとし		1			1
ほどなし	1	2		2	5
ほそし	3	4	4		11
まぎれなし				1	1
まことし	3		2		5
まことなし			1		1
まことらし	1		1		2
まさし		1		1	2
まさなし	1	1	1	1	4
またし <small>(まっ たし)(全)</small>		2			2
またなし	3			2	5
まつはれにくし				1	1
まぢかし	1	1			2

見出し語	角川		明治		計
	乙I	乙II	乙I	乙II	
まづし		1			1
まばゆし		2		1	3
まめまめし	1	1	1		3
みぐるし	1		1		2
みさだめがたし			1		1
みじかし	1	3	2		6
みすてがたし		1			1
みだりがはし		4		2	6
みにくし				2	2
みほそし			1	1	2
みもとし		1			1
むくつけし				3	3
むつかし		4		2	6
むつまじ	2	1	1	3	7
むなし	1	6	1	3	11
むなづはらし			1		1
めざまし		3		3	6
めづらし	5	20	2	8	35
めでたし	16	7	10	16	49
めめし		1			1
めやすし	1			2	3
もつたいなし	1				1
ものうし	1				1
ものおもはし		2			2
ものがなし	1		1		2
ものうとし				1	1
ものおそろし				1	1
ものくるはし		1			1
ものぐるほし	2	2	1	1	6
ものけちかし		1			1
ものこほし	1				1
ものこころほそし	1		1		2
ものさわがし	2		2		4
ものすごし				1	1
ものちかし		1			1
ものほかなし		3		2	5
ものほづかし				1	1
ものむつかし				1	1

見出し語	角川		明治		計
	乙I	乙II	乙I	乙II	
ものものし			1		1
ものわびし			1		1
もろし				2	2
やかまし			1		1
やくなし		1	1		2
やさし		6	3		9
やしなひがたし		1			1
やすし	6	6	2	4	18
やみがたし				2	2
やらむかたなし		1		2	3
やるかたなし				2	2
やんごとなし		6	1	4	11
ゆかし	4	3	4	3	14
ゆくりなし				1	1
ゆゆし	1		1	6	8
ゆゑなし			1		1
ゆゑゆゑし	1				1
ようなし		1			1
よし	17	24	18	15	74
よしよし	1	2			3
よになし	2	1			3
よぶかし	1			1	2
よりどころなし	1				1
よろし	1	6	1	1	9
よわし	1			1	2
らうがはし				1	1
らうたし		1	1	2	4
らうらうじ	1				1
わかし	2	9	7	11	29
わかかわし				1	1
わかれがたし	1		3	2	6
わすれがたし	1	2	1		4
わづらはし	1	3	1	3	8
わびし	7	6	4	3	20
わりなし	1	7	1	7	16
わるし	2	1			3
わろし	3		7	3	13
をかし	36	18	23	25	112

見出し語	角川		明治		計
	乙I	乙II	乙I	乙II	
をぐらし		1			1
をこがまし	1		1	1	3
をさなし	5	8	3	3	19
をし	1	1	2	2	6
をし		1			1
計	676	823	641	838	2978

(形容動詞) 見出し語	角川		明治		計
	乙I	乙II	乙I	乙II	
あえかなり			1	1	
あざやかなり	1		2	2	5
あしげなり			1	1	
あだなり		1	1	2	
あつらかなり(厚)	1			1	
あてはかなり			1	1	
あてなり	3	2	1	3	9
あながちなり		4		2	6
あはただしげなり		1		1	
あはれなり	27	21	34	41	123
あまりなり	1			1	
あやにくなり	1		1	1	3
あらたなり	1		1		2
あらはなり	1	3	1	5	10
ありげなり		3		1	4
あきらかなり			1		1
あからさまなり			1	1	2
あやしげなり			1	1	
あやうげなり			1		1
あららかなり				1	1
あそやかなり				1	1
いうなり	1	1	2		4
いかなり	14	23	12	40	89
いかさまなり	1			2	3
いかやうなり	1				1
いささかなり	1	1			2
いたげなり				1	1

見出し語	角川		明治		計
	乙I	乙II	乙I	乙II	
いたづらなり	1	2	1	4	8
いまさらなり		2	1		3
いみじげなり		1			1
いやたかなり		1			1
いやとほなり		1			1
いんぐわなり	1				1
うちつけなり				1	1
うつくしげなり	2	4		4	10
うらめしげなり	2		2	1	5
うらやましげなり	1				1
うららかなり		1			1
うれしげなり	1		1		2
えんなり		2		4	6
おいらかなり		2			2
おくびやうなり	1				1
おそろしげなり	3	1	1	2	7
おとなしやかなり		1			1
おほきなり	13	1	3		17
おほまかなり	2		2		4
おほろげなり	1		1		2
おもげなり	1				1
おもはずなり	1	1			2
おもひがほなり		1			1
おもりかなり				1	1
おろかなり	2	1	3	1	7
かいしのび やかなり				1	1
かたほなり			1		1
かすかなり	2		1	3	6
かたくななり	2		2	1	5
かたなりなり		1			1
かやうなり			3		3
かりそめなり	1	2	1	1	5
かれがれなり (枯々)	1				1
かろらかなり				1	1
きなり(黄)	1	1			2
きなり(奇)		1			1
きはやかなり	1				1
きびはなり		1			1

見出し語	角川		明治		計
	乙Ⅰ	乙Ⅱ	乙Ⅰ	乙Ⅱ	
きやうぎやうなり (軽々)		2			2
きよげなり	4	3	3	14	24
きよらなり	2	1	1	2	6
きたなげなり			2		2
きゆうなり			1		1
くるはしげなり		1		1	2
すみぐろなり			1	1	1
けうなり(希有)	2			2	2
けうとげなり			1	1	1
けうらなり			1		1
げざやかなり	1	1	1		3
けそうなり	1			1	1
こころあわただ しげなり		1		1	1
こころうげなり			1	1	1
こころぐる しげなり	1		1	2	2
こころことなり	2	2	3	7	7
こころそらなり			1	1	1
こころしづかなり	1			1	1
こころのどかなり		1		1	1
こころほそげなり	1	2	2	5	5
こころもと なげなり		1		1	1
ことさならり	3		1	4	4
ことなり	6	19	5	12	42
ことのほかなり	3			3	3
ことわりなり		4	4	8	8
このましげなり		1		1	1
こまかなり		1	5	6	6
こまやかなり	2	2	2	4	10
こわだかなり		1		1	1
さかりなり	2		1	3	3
さすがなり	5	4	2	7	18
さだかなり			1	1	1
さとがちなり			1	1	1
さままかなり	1	5	3	9	9
さまことなり	2	1	4	7	7
さむげなり			1	1	1
さやかなり		1	1	3	3
さややかなり		1		1	1

見出し語	角川		明治		計
	乙Ⅰ	乙Ⅱ	乙Ⅰ	乙Ⅱ	
さらなり	3	1	2	9	15
したりがほなり		1			1
しづかなり	2	5	1	1	9
しのびやかなり	1			4	5
しめやかなり	2	2	2		6
しふげなり				1	1
しりがほなり		1			1
しろらかなり				1	1
すぎすぎなり (次々)		1			1
すくよかなり		1	1	1	3
すごげなり				1	1
すずしげなり	1		1	1	3
すずろなり	2	2	6	1	11
すなほなり		1			1
すみやかなり	1	1			2
せちなり (せつなり)		1			1
そぞろなり	1	1			2
そむきざまなり	1				1
そらなり	2	1			3
たからかなり	2		1	1	4
ただなり		1			1
たどたどしげなり				1	1
たのもしげなり		1		1	2
たひらかなり	1		1	1	3
たへがたげなり		1			1
たまさかなり		1			1
たゆげなり				1	1
たわわりなり	1		3		4
つつましげなり		1			1
つばらなり(委曲)		1			1
つややかなり				1	1
つれづれなり	4	6	3	5	18
どりどりなり	2	1		1	4
なかなかなり	1	2	2	5	5
なげなり				1	1
なごやかなり		1		1	2
なずらひなり		1			1
なだらかなり	1				1

見出し語	角川		明治		計
	乙Ⅰ	乙Ⅱ	乙Ⅰ	乙Ⅱ	
なのめなり		1		1	2
なほざりなり		1			1
なめげなり	2		1		3
なめらかなり	1		1		2
なやましげなり	1			2	3
なよやかなり		1		2	3
なよらかなり			1	1	2
なんとなげなり		1			1
にくげなり	1				1
にはかなり	1	4		4	9
にほひやかなり			1	1	2
ねたげなり	2	1			3
ねんごろなり	2	2	5		9
のどかなり		3	2	2	7
はづかなげなり		1	1		2
はづかしげなり		2		1	3
はづかなり				1	1
はなやかなり	3	2	5	4	14
はるかなり	9	1	5	8	23
ひそかなり		2			2
ひたぶるなり		1			1
ひとかたなり		1			1
ひとずくなり	1			2	3
ひまなげなり		1			1
ひややかなり		1		1	2
ひらなり	1				1
ふくらかなり	1			1	2
ふさやかなり			1		1
ふさうおうなり	1				1
ふしぎなり				1	1
ふびんなり			1		1
ほうぞくなり				1	1
ほかざまなり	1				1
ほこりかなり				1	1
ほそやかなり			1	1	2
ほのかなり	2	2	1	2	7
まさざまなり	1				1
まどほなり				1	1
まめなり	1				1

見出し語	角川		明治		計
	乙Ⅰ	乙Ⅱ	乙Ⅰ	乙Ⅱ	
まゆぐるなり				1	1
まめやかなり		1	1	1	3
まれなり	1	2	2	1	6
みごとなり		1			1
みすぼらしげなり	1				1
みそかなり	1		1		2
みじかなり			1		1
みやびやかなり				1	1
むげなり	1	1			2
むくつけげなり				1	1
むづかしげなり			1		1
めづらかなり		3		6	9
めもあやなり	1				1
ものあらはなり	1				1
ものあはれなり	1	2	2	1	6
ものうげなり	1				1
ものおもひ					
ものがほなり			1		1
ものきよげなり		1		1	2
ものこころ		1		1	2
ものほそげなり					
ものなげかしげなり		1			1
ものうげなり			1		1
やすげなり		1			1
やはらかなり			2		2
ゆかしげなり				1	1
ゆたかなり	2		1		3
ゆるるかなり	2			2	4
よしありげなり		1			1
よそほしげなり			1		1
らうたげなり	1	4	1	4	10
りよがいなり	1				1
わかやかなり				1	1
わざとなり	1				1
わづかなり	4	2	3	2	11
わづらはしげなり		1			1
をかしげなり		5	7	4	16
をさなげなり			1		1
計	211	236	169	305	921

(この頻度調査の「明治乙Ⅰ」は中山隆一氏に協力願ったものである)

以上を異語数と使用回数によって表示すると（表2）のようになる。

（表2）

		角 川			明 治			総 計
		乙Ⅰ	乙Ⅱ	計	乙Ⅰ	乙Ⅱ	計	
形容詞	異なり語数	191	239	310	198	243	317	415
	使用回数	676	823	1,499	641	838	1,479	2,978
形容動詞	異なり語数	98	110	163	70	108	139	215
	使用回数	211	236	447	169	305	474	921

（異なり語数とは見出し語数、使用回数とは延べ語数である）

上の表のように整理してみると、二種類の乙Ⅰ、乙Ⅱの教科書に用いられている形容詞は415語、形容動詞は215語となるが、生徒が学習する語数は、一種類の乙Ⅰと乙Ⅱである訳だから、その語数は形容詞で約300余り、形容動詞は大体150語前後と見当をつける事が出来る。但し形容詞を實際指導する場合を考えると、この300語の中には「なし」「多し」「同じ」「久し」などというように、語そのものの意味では特に指導を必要としないもの、或は「ものはかなし」「ものはづかし」「ものむづかし」などのように複合の構成がはっきりしているもの、などがある訳だから、實際表立っての指導を必要とする語数は或程度減少する事になる。

次に（表1）を頻度順にならべかえると、別表後掲の通りとなる。頭書の（ ）内の数字が頻度数である。この別表の頻度数と語数の関係を表示すると（表3）のようになる。

（表3）

	頻 度 数	30以上	29	24	19	14	9	4	3	2	1
			25	20	15	10	5				
形容詞	上記の頻度をもつ語数 (415に対する%)	18 (4.4)	9 (2.2)	6 (1.5)	8 (1.9)	27 (6.6)	68 (16.4)	24 (5.8)	34 (8.2)	56 (13.5)	165 (39.5)
	累 計		27 (6.6)	33 (8.1)	41 (10.0)	68 (16.6)	136 (33.0)	160 (38.8)	194 (47.0)	250 (60.5)	415 (100.)
形容動詞	上記の頻度をもつ語数 (215に対する%)	3 (1.4)	○	2 (0.9)	5 (2.3)	7 (3.2)	29 (13.5)	8 (3.7)	21 (9.8)	31 (14.5)	109 (50.7)
	累 計		3 (1.4)	5 (2.3)	10 (4.6)	17 (7.8)	46 (21.3)	54 (25.0)	75 (34.8)	106 (49.3)	215 (100.)

これによってわかるように 形容詞 415語のうち30回以上の頻度をもつ語は18語で全体の4.4%、10回以上の度数をもつ語は68語、16.6%で、2回以上が250語60.5%、あとの39.5%、165語はただ1回だけ用いられている語である。

この調査は古典学習における基本語彙に関する一つの試みと思って行なったものである。

ただ基本語彙というものは現代語においても未だ確立されていない現状を思うと、これ

だけの資料でそれを云々する事は勿論出来ないが、この頻度の多い語は一応基本的な語句であるとして、指導されて然るべきであろうと思う。

(2)

次に生徒はこれらの語句をどの程度理解しているかを調査した。調査の対象とした生徒は、熊本市内普通高校二校の三年生200名(各校100名)、時期はその6月である。下記の「古典語彙理解度調査」としたものは、この調査のため、生徒に配布した問題文である。

古典語彙理解度調査

次のテストは古典語彙について諸君の理解度を調査するものである。これらの用いられている時代は大体平安時代だとし、以下の間に答えよ。

(I) 次の語の意味を記せ。但し多くの意に用いられる場合は、その基本的な意味、又は用例が多いと思われるものを一つ乃至二つ記せ。

- | | | | | |
|-----------------|-----------|------------|-------------|------------|
| (A) (イ) いみじ | (ロ) あやし | (ハ) めでたし | (ニ) はかなし | (ホ) くちをし |
| (ク) かしこし | (ヘ) あさまし | (ヘ) うつくし | (ワ) わびし | (コ) 心もとなし |
| (B) (イ) つれづれなり | (ロ) すさまじ | (ハ) ゆかし | (ニ) なつかし | (ホ) おぼつかなし |
| (ク) あいなし | (ヘ) はづかし | (ヘ) いとほし | (ワ) つらし | (コ) すずろなり |
| (C) (イ) おどろおどろし | (ロ) あらはなり | (ハ) らうたげなり | (ニ) やさし | (ホ) あてなり |
| (ク) つれなし | (ヘ) ゆゆし | (ヘ) うるはし | (ワ) かたはらいたし | (コ) さうごうし |
| (D) (イ) ころなし | (ロ) むつかし | (ハ) あながちなり | (ニ) ありがたし | (ホ) かしがまし |
| (ク) つきづきし | (ヘ) なまめかし | (ヘ) かたくななり | (ワ) うしろめたし | (コ) しどけなし |
| (E) (イ) ころづきなし | (ロ) ところせし | (ハ) めやすし | (ニ) おいらかなり | (ホ) いぎたなし |
| (ク) なめし | (ヘ) ほとほとし | (ヘ) もどかし | (ワ) いかし | (コ) ものし |

(II) 次の文の表現している心情や状態に最も適当な形容詞をあてるとすると、次のうちのどれが適当か、適当と思うものを選んで記号で答えよ。

- | | | | |
|-----------|-----------|-------------|-----------|
| (イ) いみじ | (ロ) おもしろし | (ハ) くちをし | (ニ) はかなし |
| (ク) うつくし | (ヘ) すさまじ | (ヘ) むつかし | (ワ) あさまし |
| (コ) 心もとなし | (コ) つらし | (ワ) ありがたし | (コ) 心づきなし |
| (ク) なまめかし | (ク) ゆかし | (ロ) まさなし | (ク) うるはし |
| (ク) すごし | (ク) さうごうし | (ク) かたはらいたし | (ク) かしがまし |
| (ク) しどけなし | | | |

(1) 五節、御仏名に雪降らで、雨のかきくらし降りたる。節会などに、さるべき御物忌のあたりたる。いとなみいつしかと待つことの、さはりあり、にはかにとまりぬる(準備シテ早クソノ日ニナルトヨイト待つテイル事ガ、支障ガ出来テ中止ニナツタ)あそび、もしは見すべきことありて、呼びにやりたる人の来ぬ。

(2) 瓜うりにかきたるちごの顔。雀の子の、ねず鳴きするに(ネズミノ鳴キ声ヲマネテチュウ一チュウ一言ウト)をどり来る。頭はあまそぎなるちごの目に髪のおほへをるかきはやらで、うちかたぶきて物など見たるひひた。籬の浮葉のいとちひさきを、池より

とりあげたる。葵のいとちひさき。

(3) 昼ほゆる犬、春の網代。(冬氷魚ヲ取ル装置) 牛死にたる牛飼。人の国よりおこせたる文のものなき。(田舎カラノタヨリニ土産ノ添ワヌノ) 除目に司得ぬ人の家。
(任官出来ナカッタ人ノ家)

(4) 刺櫛すりて磨く程に、ものにつきさへて折りたる心地。車のうちかへりたる。見すまじき人に、外へもていく文見せたる。むげに知らず、見ぬことを、人のさしむかひて、あらがはすべくもあらずいひたる(人が真正面カラ、抗弁モサセヌ程ノケンマクテ言ツタ)

(5) 祭禊など、すべて男の物見るに、ただ一人乗りて見る。ものへ行き、寺へもうづる日の雨。人よりはすこしくしと思ふ人の、おしはかりことうちし(アレコレ推量シ) すずなるものうらみし、(恨ミゴトヲ言ツタリ) われさかしがる。(目分コンハトエラブル)

(6) 舅にほめらるる婿。また姑に思はるる嫁の君。毛よく抜くるくろがねの毛抜。主そしらぬ従者。

(7) 人のもとにとみの物縫ひにやりて(急ギノ仕立物ヲ縫イニヤツテ) いまいまどくるしうり入りて、あなたをまもらへたる心地。(今か今かト苦シイ気持デジツトムコウヲ見守ル心地) 子産むべき人の、そのほどすぐるまでさけるけしきもなき。心地あしく、もののおそろしきをり、夜のおくるほど。(夜ガアケルマデノ間)

(8) ほそやかにきよげなる君だちの直衣姿。をかしげなる童女の、うへの袴など、わざとはあらで、ほころびがちなる汗疹ばかり着て、匂欄のもとなどに扇さしかくしてゐたる。薄様の草子。柳の萌え出でたるに(芽ノ出ハジメタ枝ニ) あをき薄様に書きつけたる文つけたる。

(9) よくも音ひきとどめぬ琴を、よくも調べで、心のかぎり弾きたてる。(ヨクモ調律シナイデヨイ気ニナツテ弾キナラシテイル) 客人などにあひてもものいふに、奥の方にうちとけごと(無遠慮ナコト) などいふを、之は制せて聞く心地。聞きむたりけるを知らで、人の上いひたる。旅だちたる所にて、下衆どもざれるたる(ざえ) 才ある人の前にて、才なき人の、ものおほえ声に(物知り顔ニ) 人の名などいひたる。

(10) ぬひ物の裏。ねずみの子の毛もまだ生ひぬを、巢の中よりまらばし出でたる。猫の耳の中。ことにきよげならぬ所の暗き。

(Ⅱ) (A) 次の語とほぼ反対の意に用いられる形容詞を一つずつ解答欄に記入せよ。

(イ) いまめかし (ロ) うしろめたし (ハ) はかなし (ニ) みぐるし (ホ) あてなり

(B) 次の語とほぼ反対の意として用いられる事のある語を、左の(イ)―(オ)から選び記号で答えよ。

(1) あなづらはし (2) うとまし (3) しどけなし (4) つきづきし (5) まめまめし

(イ) ひさし (ロ) つきなし (ハ) ならびなし (ニ) なつかし (ホ) はづかし (ヘ) のどけし

(ト) あだあだし (チ) うるはし (リ) てよなし (ニ) やし (ハ) むくつけし (ト) あはあはし

(Ⅲ) 次の文のアンダーラインをつけた語は、この場合、どういう口語をあてるが近い
か、適当な口語を書け。

(1)(A)警手の郡より奉れる御鸞、よになくかしこかりければ、(大和)

(B)御門の御位はいとかしこし。竹の園生の末葉(天皇の御子、御孫のこと)まで人間の種ならぬぞやんごとなき。(徒)

(2)(A)取るかたなくくちをしききはと、優なりと覺ゆばかりすぐれたるとは、数等しくこそあらめ。(源)

(B)(あの人)がなかなか読解出来ず、又忘れる箇所をも、私の方は)あやしきまでぞさりとく侍りしかば、誓に心入れたる(漢籍ノ学問ニ熱心ダツタ)親は「口惜しう。男子にてもたらぬこそ、さいはひなかりけれ。」(コノ子が男子デナカッタノハ不幸ナコトヨ)とぞ、つねになげかれし。(紫式部)

(3)(A)はづかしき人の、歌の本末問ひたるに、(和歌ノ上ノ句ナリ、下ノ句ナリヲ尋ネタ時)、ふとおぼえたる、我ながらうれし。(枕)

(B)命長さの、いとつらう思ひ給へ知らるゝに、「松の思はん」ことだに、(長命ガ大層ツラク思イ知ラズニハイラレナイ故ニ高砂ノ古松マデガ「マダ生キテイルノカ」ト思ウカモシレナイ事ダケデモ)はづかしう思ひ給へ侍れば、百敷に行きかひ侍らん事は、まして、いとばかり多くなむ。(源)

(4)(A)和歌こそなほをかしきものなれ。あやしのしづ、山がつのしわざも(木コリノスルコトモ)いひ出でつれば(歌ニ表現スルト)おもしろく、おそろしき猪のししも「ふす猪の床」といへば、やさしくなりぬ(徒)

(B)世の中を憂しとやさしと思へども飛びたちかねつ鳥にしあらねば(万)

(5)(A)(左近衛大将源高明が流されなかつたという事をきゝ、)あいなしとおもふまで、いみじうかなしく、心もとなき身だにかく。(私ノ身デサエコノヨウニ悲シク思ワレル)おもひしりたる人は(マシテ高明公一家ニ親シク、ヨク知ツテイル人ハ)袖をぬらさぬといふたぐひなし。(蜻蛉)

(B)ちごの五十日、百日などのほどになりたる、行く末(将来)いと心もとなし(枕)

(I)は語の意味を全くなまのまゝ、基本形でたずねたものである。この場合(A)としたものは頻度 19 以上のもの、(B)は 18~11 まで、(C) 10~7、(D) 6~4、(E)は 3 回以下の頻度をもつものである。

(II)は単に現代語への言いかえだけでなく、その語の語感をどう、どの程度理解しているかについて調査したものである。

(III)は反意語についての調査である。一つには語彙力を豊富にするため、一方では語のもつ意味をより深く系統的に理解するためには、類義語や反義語などについての配慮があってよいのではないかと思つたためである。

(IV)は語の意味についての把握のしかた、理解の深さについて、それを文脈の中でどう把握する力をもつかについて調査したものである。(紙面・時間の都合で問題文がやゝ断片的となった欠点があると反省している)ここにとりあげている「かしこし」以下の5語は、心情の表現に用いるだけでなく、また一方、性質・状態の表現にも用いる事のあるものを選んでみた。例えば「くちをし」を例にみると、「失望・落胆」の心情を表わして「ガツカリダ・残念ダ・情ナイ」などの訳語をあてる場合と、そのような失望・落胆感を

抱かせる客観的な状態、即ち「何ノ期待ノモチヨウモナイ、ツマラナイ」などの訳語を用いる場合があるわけだが、そこらをどう理解しているかという点について調べてみたものである。この(Ⅲ)の問題文では(A)が性質状態の表現、(B)が心情表現の例である。

以上この4つの問いは上記のような意図で作ってみた問題文であるが、次の表は上記の問いについて正答をなしたものの数をパーセンテージで示した理解度の表である。

(1) (表4) 古典語彙の理解度

A	(136) いみじし	76.0	(2) あやし	68.5	(3) めでたし	68.0	(3) はかなし	41.0	(4) くちをし	80.5
65.9	(2) かしてし	68.5	(2) あさまし	31.0	(2) うつくし	66.0	(2) わびし	73.5	(2) 心もとなし	71.0
B	(18) つれづれなり	56.0	(4) すさまじ	20.0	(14) ゆかし	29.0	(13) なつかし	5.5	(1) おほつちなし	37.0
28.0	(2) あいなし	5.5	(1) はづかし	41.0	(11) いとほし	34.0	(11) つらし	31.0	(11) すずるなり	20.5
C	(10) おどろ	26.0	(10) あらはなり	42.0	(10) ろうたげなり	13.5	(9) やさし	11.0	(9) あてなり	33.5
23.6	(8) つれなし	28.0	(8) ゆゆし	10.5	(7) うるはし	20.0	(7) かにさわし	35.5	(7) さうざうし	16.0
D	(6) ところなし	22.5	(6) むつかし	29.0	(6) あながちなり	3.5	(5) ありがたし	34.0	(5) かしがまし	33.0
24.1	(5) つきつきし	33.0	(5) なまめかし	31.0	(5) かくたくななり	20.5	(4) しろあし	28.0	(4) しどけなし	4.5
E	(3) ところなきなし	7.0	(3) ところせし	14.0	(3) めやすし	10.5	(2) おいらかなり	9.5	(1) いぎたなし	2.5
7.1	(1) なめし	0.5	(1) ほとほとし	0	(0) もどかし	26.0	(0) いいかし	1.0	(0) ものし	0

(A)65.9 (B)28.0などの数字は各々の平均、(136) (62) など語の頭付の数字は表1による頻度数)

(1)

1	くちをし	57.0	2	うつくし	39.0	3	すさまじ	24.0	4	あさまし	13.5	5	心つきなし	7.0
6	ありがたし	38.5	7	心もとなし	37.0	8	なまめかし	21.5	9	かたはらいたし	20.0	10	むつかし	12.5
平均 27.0														

(II)

A	いめめかし— (ふるめかし) 31.5	うしろめたし— (うしろやすし) 17.5	はかなし— (はかばかし) 2.0
	みぐるし—(めやすし) 7.0	あてなり— (あやし、いやし) 55	
B	あなづらはし— (はづかし) 12.5	うとまし— (なつかし) 24.5	しどけなし— (うるはし) 10.5
	つきづきし— (つきなし) 24.5	まめまめし— (あだあだし) 26.0	平均 16.4%

反意語の理解度 Aは記入式 Bは記号による選択式

(III)

かしこし	くちをし	はづかし	やさし	心もとなし	平均	31.4
A 51.0	A 11.5	A 37.5	A 3.0	A 5.5	A	21.7
B 12.5	B 77.5	B 36.0	B 0	B 79.0	B	41.1

1つの語についてABともに正解の数は79、即ち7.9%であった。

上記(表4)についてみると、(I)のAからEの上述の通り頻度により分けた段階で、例えばAの10語についてみると、頻度(136)の「いみじ」のもつ意味の大体を理解しているものは、200名中、その76%、頻度62の「あやし」では83.5%……頻度19の「心もとなし」は71%で、以上10単語、即ち頻度19以上をもつA段階の平均は65.9%の如くなるものである。以下Bが28%、Cは23.6%、Dの24.1%、Eはわずか7.1%の正答となる訳である。次に(II)の表では「くちをし」と答えるべきものの正答率57%、「うつくし」は39%で、(I)の「くちをし」80.5%、「うつくし」66%とは大分ひらきがある。これは何を物語るのであろうか。単に訳語、即ち言いかえは出来ても、実際の理解に達していない場合がある事を示すものであろう。(III)の反意語の理解は、(A)は記入式、(B)は選択式で答えさせたものである。(A)では「あてなり」を除けば語構成からみても明らかに対をなすものであるが、結果からみれば(B)の方が良くなっている。

「はかなし↔はかばかし」の理解が、わずか2%で、「つきづきし↔つきなし」の正答が24.5%という結果は色々考えさせてくれる。というのは「はかなし」の頻度は35、「はかばかし」は5、それに対し、「つきづきし」は5、「つきなし」は3である。(I)の正答率をみても「はかなし」は41%、「つきづきし」は35%である。こう見ると、どうしても「はかなし↔はかばかし」の組みあわせが高い筈だと思われる訳だが「つきづきし↔つきなし」の方が反対に高いのは、Bの方は記号による選択式であったため、山勘による正答がいくらかあったのではないかと思われるのである。私は語彙の指導では、このような原理を逆に利用して、生徒が山勘でもあてうるような対語などは始めから東にして教えておくのが効果的であり、又そうする事によって、生徒の興味も大いに湧いてくるのではないかと思うのである。最後に(III)の結果は表示の通りであるが、ただこの場合ABともに正答、言いかえれば、ある語について、心情表現の場合も、状態表現の場合もともに理解している数は延べ79、解答数延べ1000(5×200)に対し79、即ち7.9%であった事も注意すべきではないかと思う。

所で(表5)は(I)の正答によって、形容詞の理解語数を統計的に推定してみたものである。

(表5) 形容詞理解語数推定表

類	度	語数 (N_i)	サン プル	正答率 (\bar{x}_i)	$N_i \bar{x}_i$
A	(19以上)	36	10	0.66	23.76
B	(18~11)	27	8	0.27	6.75
C	(10~7)	32	7	0.21	6.72
D	(6~4)	65	8	0.27	17.55
E	(3~1)	255	6	0.06	15.3
計		415	39	$\sum_i N_i \bar{x}_i$	70.08

ただサンプルの取り出し方などに未だ不完全な所があるのでその点考慮せねばならない点はあるが、これによると、生徒の理解語数の推定結果は約70語で、全体の415との比率は0.169約1割7分の貧弱さとなる。なお履習語を300としてその比をみると、約2割3分となる。然しこの理解度も(I)のような問いの場合であって、(II)(III)(IV)の正答率ももっと下まわっている点から生徒の古語の理解度は予想以上に低いと見なければならぬ。

$$\frac{1}{N} \sum_i N_i \bar{x}_i = \frac{70.08}{415} = 0.169$$

以上ながめたこのテストは勿論標準的なものではあり得ないし、私自身の主観性の強いものとなっているかもしれないが、それはそれとしても、どう指導すれば、語彙力を豊かにし、古典読解の基礎力を身につけうるかという事は当然考えねばならない問題かと思う。

(3)

大体どのように指導するのが効果的であるかを調べるためには、幾通りもの実験を行なってその結果を検討すべきであると思う。従って語彙指導にも幾通りもの実験を行なうべきであると思うが、この場合種々の事情でこれが満足には出来かねたので、二通りの実験を行なってその差異をみるにとどめた。

まず2年生のA組、B組の2組に、形容詞20語の用例を示したプリントを配布した。

(但し小稿には省略)そしてA組ではその20の形容詞を指導し説明するのに主として辞書的な言いかえを中心に行なった。例えば「おぼつかなし」という語では、辞書によると、①「はっきりしない、おぼろである」②「心もとない、はっきりつかめなくもどかしい」③「待ち遠しい」④「うとい、うとうとしい」⑤「気がかりだ、心配だ」⑥「知りたい、不審だ」と書いてある この例文は①がよい。この例は⑤である……というようにしてみた。

一方B組では、以下記す実験資料に書いてような事を中心に指導してみた。(勿論この資料は指導者の控えて生徒には配布しなかった)次にB組の方を指導した内容の実験資料を記すと、

語彙指導法実験資料

うしろめたし

語源的には「後目痛し」或は「後方痛し」の約とも言われる。元来「後方から見て気がかりな気持、状態」を意味する。「見捨てて死なむはうしろめたし」のように「気がかりた、心配だ、気づかわしい」の意で、不安な感情にいう。類義語に「おぼつかなし」「心もとなし」が考えられ、反義語に「うしろやすし」がある。

おぼつかなし

「うしろめたし」と同じく不安感を表わす語に「おぼつかなし」がある。これは対象がぼんやりしてよくわからない所からくる不安感にいう。時や場所が遠くへだたつて相手の様子がわからない時、心のへだたりのため相手の気持がつかめない時、又どういふ事があつたのか、これからどうなるかなど物の事情がよくわからない時、そのような対象の不分明からくる不安感に用いられる。「(桐壺の帝は更衣なき後)時の間もおぼつかなかりしをかくても月日は経にけり」では「一寸姿が見えないと、どうしたのかと、そのへだたりが不安でしかたなかつた」というのである。

語源的には「おぼ」は「おほろ」などの「おほ」で「漠然とした」の意をもつものである。この語は万葉に三例あるが「対象がポーッとしてみどころのない。ぼっとしてよくわからない」の意で用いられている。「春されば樹の木の暗の夕月夜おぼつかなしも山陰にして」(1875)(春になつたので木立のくらがりにさす夕月の光がぼんやりとしてゐる。この山陰では)などがそれで、この用法から、平安時代にいり、情意を表わし、「相手の状態がわからないので、不安だ・知りたい・会いたい」などの意に用いられるようになったものであろう。類語に「心もとなし」がある。この語は根本に、好奇心や期待・願望があつて、それが満たされるかどうかを不安がつたり、待ち遠しく思つたり、もつとくわしく知りたいと思つたりするのに用いる。

いかし

語源的には「いか」(厳・偉・猛)を語根とした語で、この「いか」は「いかつい顔」「いかる(怒)」などの仲間であろう。「恐ろしげにいかき者」(中津保)「頼もしういかさまを人に見せむ」(源)などのように「勇猛だ、荒々しい」「勢が盛んだ、いかめしい」などの意に用いる。「いかく見える」ものが、厳見→いかめし、であり、これは「いかし」より客観的・外観的表現である。

やさし

語源的には「瘦す」→「瘦さし」で身の細るような思い、消え入りたいような気持を表わす。「恥づかしい・きまりが悪い」などと口訳語するとよからう。源氏物語の頃までは、このような心情の表現に用い「恥づかし・面なし」などの類義語として用いられているようだが、大体この前後からやゝ転義が感じられる。つまり「おのを抑制してつましくふるまうさま」「やさしく思つて自己をあらわにしないしとやかさ、つつましさ」、そのような状態は第三者から見ると「優美であり、しとやかであり、上品である」のである。前者は心情の表現に、後者は転じて性質・状態に用いるのである。

むつかし

「倭訓栞」（江戸時代の辞書・1777）に「^{ムツカシ}償より転したる詞也わづらはしき意にいへり」とあるように、動詞「むつかる」と同根の形容詞である。枕草子「むつかしげなるもの」には「縫ひ物の裏」（刺繍の裏）「猫の耳の中」「清げならぬ所の暗き」などがあげられているから「すべてごたごたして煩わしく気の晴れない不快感のあるもの」をいうようである。従つて「不快だいやだ」「ごたごたして煩わしい。うるさい。めんどうだ」などと口訳して当る場合が多い。

くちをし

この語の語源は「倭訓栞」に「^{クチ}朽借の義なるべし口借と書はあらし」とあるが、そうみると「朽ち」一物事が駄目になる一のが惜しいの意がもとであろう。心情を表現する場合と、性質・状態の表現の場合がある。心情表現の場合は自分の思い描いた計画が何かの故障で実現出来なかつたり、夢や期待がもろくもくずれたり、要求が通らなかつたりして味わう、失望・落胆の気持にいう。「がっかりだ、残念だ、情ない、くやしい」などと訳すと大体当る。一方状態・性質の表現は、このような失望・落胆を味わせる客観的状态の表現に用いる「見てがっかりするような、何の期待のもちようもない」状態、すなわち「つまらない、劣っている」などの意となる。

類義語ともいえるものに「くやし」がある。これは「^ク悔ゆ→悔やし」で、後悔の念を表わす「後悔される」とでも訳すと近い。

なつかし

「のぞむ→のぞまし」「やす→やさし」の語構成法からみて、動詞「なつく」と同根であるのは明らかである。倭訓栞に「馴着・馴著」とあるように「なれつきたい・いつも側にいたい」の原義から、対象に親愛感をもつてなれ親しみたいのが「なつかし」である。現代語においては懐旧の意に用いるが、古くはそう用いない点が大いに異なる。「親しみが感じられる・親しみがもてる・心がひかれる」などの訳をあてる事が多い。反意語は「うとまし」であろう。

すさまじ

枕草子によれば「^ス罵はゆる犬。春の網代」或は「牛死にたる牛飼。ちごなくなりたる産屋・火おこさぬ炭櫃・地火焔」などがあげられている。ここにあげられている点からみて、この語は、時期を失したものの、本来の価値・目的・意義をうしなつたことによる不快感に用いられたようである。「つまらない・魅力がない・興ざめだ・面白くない」などの口訳があたる。同根の動詞に「^スすさむ」（世の中をもすさみ、宮仕へをも忘れて）がある。

かしこし

まず心情を表わすものとして、ある威力をもつものに対する、畏怖・畏敬の念を表わす。動詞に「かしてまる」「かしてむ」があるが、ある対象の威力に恐怖し、畏敬し、これらに対し、かしてまるのが、この語の原義である。この場合「恐ろしい・恐るべきだ」と口訳すればよい。畏怖、畏敬の念はそれに対して慎しむ態度を伴うので「恐れ多い・慎しむべきである」の意となる。又人々が、かしてまるもの、人々がかしこしと思う対象

の中には、人の才能がある。物事を巧みに処理し、学識があるのは人の畏敬の念をよびおこす。「才知が優れている・賢い・すぐれている・立派だ」の訳語をあてると大体あたる状態。性質の意に用いられる。又副詞的に用いて「非常に」の意に用いられる。

つれなし

万葉集に「由縁母無」を「所由無」を「ツレモナク」と訓じている所から「たよりどころのない、語りかけるすべもない」という主体の感情を対象に移して容体化したものである。「つれ」は「こちらと同じ心になるべき心」とすれば「連れ」であろうか。平安朝のこの語は「無心平気」の意となる場合と「冷淡無情」の意となる場合とある。期待に反して何事も起らないような客観的事態、或は、心にあつても何気なくつくるつていっているそぶりなどが「つれなし」である。

つきづきし

物に外から何かが密着する意の「つく」という語を重ねて構成された形容詞である。ほればれし(惚々)はればれし(晴々)などの構成と同じで、いかにも……らしい、意を表わす。一方の対象に調和する(つく)ように、こちらをさしむけていく、初めから何かに調和しているのではなく、調和するようにしむけて初めてびたりすることを原義とするらしい。「いかにも似つかわしい、いかにもふさわしい、調和している」などの訳語が当ることが多い。類義語に「につかはし」反意語に「つきなし」がある。(「はかばかし」←→「はかなし」の語構成法とも似ている)

はづかし

動詞「恥づ」を語根とした形容詞。まず心情の表現として、対象の優と、自分の劣とを対比した遠慮と眞しきをもつ緊張した感情の表現に用いられる。「きまりが悪い・気がひける」と口訳すれば大体よい。又、この語は、それを客体化して、こちらがきまり悪くなるような先方のすぐれたさまにもいう。「心はづかしき人の住むなる所にこそあなれ」(源・若紫)では「こちらが気がひけるような人、高德で気のおける人」の意である。形容詞「はづかしげなり」となると、多くの場合この対象の状態を表現し、その優秀さというようである。なお、枕草子「にくきもの」の中で「あなづらはしき人ならば、後にとてもやりつづけれど、さすがに心はづかしき人いにくくむつかし」とある所からみて「あなづらはし」は対語である。少々の出入りがあるが、類義語に「やさし」「面なし」或は「人わろし(人からよくないと見くびられる状態—「体裁がわるい、恥づかしい」)」がある。

ゆかし

倭訓栞に「心の往んとする意なるべし」とあるが、確かに「(心)往^ゆ→往かし」の語構成が考えられる。枕草子「とくゆかしきもの……人の子生みたるに、男・女とく聞かまほし」源氏「御かたちを見ばとゆかしうおぼして(紅梅)」などからみて「見たい・聞きたい・知りたい」など、ある対象に心がひかれる感情にいう語である。類似語とも言えるものに、「心もとなし」があつて、これも対象に心をひかれる感情を表現するが、これは対象に対する不安・不満をもつ点で「ゆかし」と相違する。

わびし

「わぶ」という動詞と同根の形容詞、源氏などの用例では、悲哀・絶望・困惑・閉口など、自分一人で感情を内攻させて動きがとれない、いわば「精神的困窮・困惑」の気持の表現に用いられる事が多いと説かれる。「つらい・困る・苦しい・心細くやりきれない」等の訳語が当る事が多い。平安時代頃まではこのように心情語として用いられていて、「身一つ**わびし**からで過ぐしけり」（宇治拾遺）のように「貧しい・みすぼらしい」の意の状態の表現に用いられた例は源氏にはないといわれる。たゞ「わびしげなり」となると「よろづの事よりも、**わびし**げなる車に装束わるくて物見る人、いともどかし」（枕）のように、「みすぼらしい、貧乏だ」の意の物質的困窮欠乏に用いる。なお動詞「わぶ」が、他の動詞について「待ちわぶ」の如く用いられると、その事に疲労困憊してなしあぐむのにいう、「～しかねる」の訳すと当る事が多い。

めやすし

「目安し」であろう。増補語林俊訓彙には「見る目も心やすきをいふ」とある。元来「やすし」という語は、心が穏かで抵抗感のないのにいう。「苦し」と対になるものである。「心やすし」が安らかな気持、気のおけないのにいうのに対し、「心苦し」が心に抵抗感のある、気にかゝるのに、或は「苦し」の内容が少し同情面へ移つて、「気の毒だ・いたわし」などの意に用いられる。とするというまでもなく、この対話は「見苦し」である。「見苦しくない・感じがよい」などの口訳をあてると大体よい。

もどかし

「もどく」という動詞がある。「もどく→もどかし」とみると、これと同根の形容詞である。「もどく」という動詞は、元来、「戻る・戻す」と同根でもあるといわれる。「もどく」は大言海によると、「モトラカス・逆フ・然ハアラズト批判ス・非難ス」とある。宇津保に「此七歳なる子、父をもどきて、高麗人と文をつくりかはしければ」とある。この「もどく」は梅もどき・雁もどきの類で「物に似せまねる」意のようである。人の口まね、手まねをしてあこがれとあげつらうことは転じて非難する意になるといわれる。そこで「もどかし」とは、あれこれ言つて非難したい、の意に用いられる。

さうざうし

古来「寂々・寂寞」の字をあて「さびさびし」の音便とされているが、近時^{サクサク}「佐久佐久志」の音便であるとも説かれる。俊訓彙に「これはあるべき物あるべき事のなくてたらぬが淋しきをいへり」とあるように、あるべき物のない物足りなさを中核としている。「さびしい」という意味を表わすのに、平安時代「さびし・さうざうし・つれづれなり」がそれぞれ相犯さない用法で並立していた。「さびし」は広い荒れた邸宅などに人のすくない様、人に別れたあとの空虚感というように情趣感が勝っている。「つれづれ」は環境的なもので、語るべき人もなく、手もち無沙汰で、美の対象とはならないが、美を生み出す境地とはなる。これらに対し「さうざうし」は、何か興味が欠けているために感じる物足りなさである。「さびし」は、美的契機を具しているが、「さうざうし」はいわば歌にならない非美的感情である。「物さびしい・物たりない感じだ」などの訳語がよくあたる。

うつくし

万葉には動詞「うつくしむ」と共に、「愛・恵」をも訓んでいる。上代では非常に親密な肉親的な愛情を表現するものであつた。平安朝では、「瓜にかきたるちごの顔……をかしげなるちごの、あからさまにいだきてうつくしむほどにかいつきて寝たる」のなど、枕草子で言われているように、乳児とか幼い子供、或は小さいものを可愛いと思う気持ちに用いられる。(室町時代の狂言などをみると、今日のような「美しい」の意に用いられているようである)「可愛い」という訳語をあてるのは、この小さくて可愛い「うつくし」の外、「らうたし」「かなし」などがある。

らうたし

語源的には「勞・甚し」であろうといわれる。倭訓栞には「いたはり惜む意にいへり」とある。「可愛い」に口訳する語の中で「うつくし」は、小さき者に対するかわいさに近い。「かなし」は「(平凡な子でも)これをかなしと思ふらむは親なればぞかし」(枕)の如く、親が子に、夫が妻に、など、肉親の情において「おさえきれないかわいさ」にいう。これに比し、「らうたし」は、源氏では妻子、恋人への愛情に用いられることが多く、更級では「猫をらうたが」ついている。この語は根本的な意味は、自分より劣つた無力の人間、自分の配下にあるものなどに対し、手をかし力になりたい感情であるといわれる。又「愛重する」意から客体的な「愛らしい」意になつたともいわれる。

こころづきなし

語源的には「心・付き・なし」で「つき」は動詞「つく」の連用形から、従つて「つきなし」は「心に付く所がない」から「ふさわしくない・好ましくない」の意である。この語は、このような語源的な感じが生きていて、相手の人の状態や行為が、自分の好みとかけ離れて低く感じられる時に使われる。従つて、同情・共感のないむしろ感情的嫌悪を表わす事が多い。「意に満たない・氣にくわない・心にしつくりしない・面白くない」などの訳語をあてる。

〔参考文献〕原田芳起氏「平安時代文学語彙の研究」大野晋氏「日本語の年輪」「倭訓栞」「大言海」「解釈と鑑賞」24巻第12号・26巻第3号・27巻第12号
日本古典文学大系「万葉集」「宇津保物語」の補注

(解説は日常教室で行なつていっているのを中心とし、更に上記の文献によりまとめたものであるが、なかならず「解釈と鑑賞」24巻第12号(源氏物語ハンドブック)の説による所が大きい。)

いささか煩瑣すぎる感があるが、実験資料は上記の通りである。

こうしてA・B組の2組に各々異なつた指導を行なつた訳だが、これに用いた時間は2組とも100分であつたので、辞書的な解説を主としたA組では、比較的反覆的説明が多くなり、B組では、資料に記しているように、語源説・語構成・同意語・反意語・語の意味の動きなどにわたつて指導した訳である。このように2クラスを同じ語について別々に指

導し、約一週間後にその理解度を調査した。
次にその問題と結果を記す。

次の傍線の語の基本形の意味を記せ	12 御心は <u>なつかしう</u> おはしけり
1 頼もし <u>う</u> かきさま	13 <u>はづかし</u> き歌よみ
2 行く末 <u>う</u> しろめたし	14 言ひつづくるも <u>むつかし</u> き事どもなり
3 三寸ばかりなる人、 <u>いとうつくしう</u> てゐたり	15 四十にたらぬほどにて死なんこ <u>そめ</u> やすかるべけれ
4 時の間も <u>おぼつか</u> なし	16 さうぞくわろくて物みる人いと <u>もど</u> かし
5 <u>か</u> しこき仰せ言	17 おそろしき猪のししもふす猪の床といへば、 <u>やさ</u> しくなりぬ
6 <u>く</u> ちをしとおぼす	18 ねびゆかむ様 <u>ゆかし</u> き人かな
7 やつれたる旅姿いと <u>ところづ</u> きなし	19 <u>いと</u> らうたきものにおぼす
8 人なくて <u>さうざう</u> し	20 身一つばかり <u>わび</u> しからで過ぐしけり
9 <u>す</u> さまじきことにいふなる冬の月	
10 <u>つ</u> ぎつきしき家居	
11 <u>つ</u> れなき人	

問いは上記のように全く簡単な問ひ方で行なつたが、その正解数はA・B組とも53名中下記の表の如くであった。数字は正答したものの人数である。

(表6)

語組	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
A	17	40	50	18	18	30	15	32	8	13	22	26
B	24	48	52	17	24	34	27	42	11	25	22	34
語組	13	14	15	16	17	18	19	20	合計	得点平均	百点法	
A	26	14	24	6	23	9	29	7	417	7.9	39.5	
B	30	22	27	10	38	17	38	7	549	10.4	52.0	

(この実験は光永静彦氏の協力によりなつたものである)

これは語彙指導についての一つの実験であつてB組のような指導が最もあるべき姿などと結論づけようとするものではない。ここで言える事は、A組の方法——この方法が一番多く普通に行なわれている方法であろうと思われるが、それよりB組の方が結果として良かったという事である。一定の時間のもとで行なわれる古典学習においては、読みうる量には限度がある。従つて指導者がある語について根本的な全体的な解説を要領よく与える事も必要であろうと思うものである。こうして語の中心的な意味をよく理解しておいてこそ、指導要領などにいう、文脈にそくした適訳が出来るのではないかと思う。

古文の学習が訓詁的なものに終ってはいらないという事は 指導 要領にも 説く所であるが、確かにその通りであると思う。然し文学作品を語学的に解明する事は解釈の一過程として必要である。このような解明を通してその奥にある作者の心、作品の美しさにふれる事によって「思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにする云々」という指導目標に迫れる訳である。我々は古文解釈の場合、方法的には細かくせんさくする事は多いが、語句の方は比較的軽く読み流しているのではないかと思われる。このような反省にたつて語句をもう一度整理して、整理された形で生徒を指導すると、生徒はその面白さを感じて語句、ひいては国語に愛情を感じてくるのではないかと思うものである。(表6)の示す39.5%と52%の差の原因の一つも生徒の興味と関心の差にあると考えられるのではなからうか。

小稿は昭和39年11月、熊本市において催された九州地区高等学校国語教育研究大会で口頭発表したものをまとめたものである。3章以下は更に深く考察しなければならないと思うが、語句指導のあり方の口火を切る心算であえて発表したものである。大方の御教示が得らるれば幸である。

別 表

形 容 詞 (頭書の数字は頻度数)

- (271) なし、 (136) いみじ、 (112) をかし、 (82) おほし、 (74) よし、
 (63) かなし、 (62) あやし、 (58) ちかし、 (49) めでたし、 (45) おなじ
 (42) ひさし、 (39) いたし、 (37) うれし、ふかし (35) はかなし、めづらし
 (33) しろし、 (31) くちをし、 (29) わかし、 (28) おもしろし、こころほし
 (27) あし、うし (26) おそろし、とほし (25) こひし、ながし
 (24) かしこし、たかし (21) あさまし、うつくし、かぎりなし
 (20) わびし、 (19) くるし、こころもとなし、をさなし
 (18) ちひさし、やすし (16) わりなし (15) こころうし、こし
 (14) いふかひなし、すさまじ、とし、ゆかし
 (13) こころぐるし、こよなし、さむし、なつかし、わろし
 (12) あいなし、おそし、おぼつかなし、はづかし
 (11) いとほし、いやし、くらし、しげし、たのもし、つらし、ほそし、むなし、
 やんごとなし (10) うらめし、おどろおどろし、おほし、すずし、ふるし
 (9) おもし、かたし(難)、たふとし、にくし、ねたし、はやし、ひとし、やさし、
 よろし (8) あかし(明)、かたし(固)、たへがたし、つれなし、ゆゆし、わ
 づらはし (7) あかし(赤)、あぢきなし、うすし、うとまし、うるはし、かた
 じけなし、かたはらいたし、かひなし、さうごうし、すくなし、たけし、むつまじ、
 (6) あらし、いはむかたなし、こころなし、こころにくし、ことごとし、しるし、
 せんかたなし、つゆけし、みじかし、みだりがはし、むつかし、めざまし
 ものぐるほし、わかれがたし、をし

- (5) あさし、ありがたし、いたはし、いふかたなし、かしがまし、からし、きたなし、くはし、くまなし、くろし、こころふかし、こちたし、さかし、さだめなし、したし、すてがたし、つきつきし、なさけなし、なまめかし、はかばかし、はしたなし、ひろし、ほどなし、まことし、またなし、ものはかなし
- (4) あをし、あやふし、いそがし、うしろめたし、うるさし、うらやまし、かくれなしきよし、けし、けちかし、しどけなし、すきずきし、すごし、せびもなし、そこはかとなし、たやすし、つつまし、つよし、ひまなし、ほいなし、まさなし、ものさわがし、らうたし、わずれがたし
- (3) あつし (熱)、あわただし、いはけなし、いまいまし、いまめかし、うたがひなし、うらなし、かどかどし、かよわし、かるし、くだくだし、けだかし、こころづきなし、こころつよし、こころやすし、こぶかし、さがたし、しのびがたし、せばし、たぐひなし、つきなし、ところせし、はげし、ひとげなし、ひとわろし、まばゆし、まめまめし、むくつけし、めやすし、やらむかたなし、よしなし、よになし、わるし、をこがまし
- (2) あたらし (惜)、あつし (暑)、あやなし、あへなし、あらたし、あらあらし、いとし、うもれいたし、うらがなし、うひうひし、えうなし、おびただし、おもひすてがたし、かうばし、くすし、くやし、けうとし、けどほし、げにげにし、こころあわただし、こころさわがし、こころはづかし、さまよし、さりげなし、じやうずめかし、すべなし、せんなし、ただし、とほし、なげかし、なごりなし、なにとなし、なやまし、なんなし、になし、のどけし、はなはだし、はらだたし、ひがひがし、ひくし、ひとびとし、まことらし、まさし、またし、まちかし、みぐるし、みにくし、ものおもはし、ものがなし、ものこころぼそし、もろし、やくなし、やみがたし、やるかたなし、よぶかし、よわし
- (1) あいぎやうなし、あきたし、あざれがまし、あだあだし、あたらし (新)、あつかはし、あなづらはし、あまし、あやふし、あらけなし、あらまし、あらまほし、いぎたなし、いたいたし、いたりがたし、いちじるし、いつともなし、いときなし、いとどし、いとまなし、いなびがたし、いふかぎりなし、いぶせし、うつつなし、うたてし、うちすてがたし、うとし、うらさびし、うたがはし、うまし、えがたし、おさへがたし、おそれおほし、おだし、おほけなし、おぼめかし、おとなおとなし、おとなし、おもだたし、おもひえがたし、かそけし、かだまし、かるし、かるがるし、かるがるし、かまびすし、ぎこつなし、きびし、くさし、くちがしこし、くまぐまし、くもりなし、くらべくるし、けおそろし、けけし、けぶかし、けやけし、こぐらし、こちあし、こころすどし、こころよわし、こころさかし、こころわかし、こだかし、こちなし、ことあたらし、ことおほし、ことたかし、ことにがし、こわし、こめかし、こめがたし、さいかくらし、さうなし、さし、さだまりがたし、さびし、さまあし、さやけし、さむけし、さわがし、しほらし、すげなし、すみうし、そうなし、たよりなし、たぎたぎし、たちはなれがたし、たはぶれにくし、たのし、たとしへなし、たとへむかたなし、たゆし、たよわし、たのもしげなし、たたはし、

たちはなれにくし、たどたどし、たくまし、つくしがたし、つめたし、つたなし、
 つゆしげし、とどめがたし、ときじ、ながながし、なごりをし、なきげぶかし、
 なほなほし、なだかし、なまくらし、なまかたくなし、なめし、なまなまし、
 ならびなし、なれなれし、にげなし、ぬるし、ねぶたし、のがれがたし、
 はかりがたし、はしげやし、ほらあし、ほらひがたし、びんなし、ふるめかし、
 ふせぎがたし、ふとし、ほし、ほとほとし、まぎれなし、まことなし、
 まつはれにくし、まづし、みさだめがたし、みすてがたし、みほそし、みもとし、
 むなづはらし、めめし、もつたいなし、ものうし、ものうとし、ものおそろし、
 ものくるはし、ものけちかし、ものほし、ものすごし、ものちかし、ものはづかし、
 ものむつかし、ものものし、ものわびし、やかまし、やしなひがたし、
 ゆくりなし、ゆゑなし、ゆゑゆゑし、ようなし、よりどころなし、らうがはし、
 らうらうし、わかわかし、をぐらし、ををし

形容動詞

- (123) あはれなり (89) いかなり (42) ことなり (24) きよげなり
 (23) はるかなり (18) さすがなり、つれづれなり (17) おほきなり
 (16) をかしげなり (15) さらなり (14) はなやかなり (11) すずろなり、
 わづかなり (10) あらはなり、うつくしげなり、こまやかなり、らうたげなり
 (9) あてなり、さまざまなり、しづかなり、にはかなり、ねんごろなり、めづらかなり
 (8) いたづらなり、ことわりなり
 (7) おそろしげなり、おろかなり、こころことなり、のどかなり、ほのかなり
 (6) あながちなり、えんなり、かすかなり、きよらなり、こまかなり、しめやかなり、
 まれなり、ものあはれなり、
 (5) あざやかなり、うらめしげなり、かたくななり、かりそめなり、
 こころほそげなり、しのびやかなり、なかなかなり、
 (4) ありげなり、いうなり、おほまかなり、ことさらなり、たからかなり、たわわなり、
 とりどりなり、ゆるるかなり
 (3) あやにくなり、いかさまなり、いまさらなり、かやうなり、きなり (賁)、
 げざやかなり、ことのほかなり、さかりなり、さやかなり、すくよかなり、
 すずしげなり、そらなり、たひらかなり、なめげなり、なやましげなり、
 なよよかなり、ねたげなり、はづかしげなり、ひとずくななり、まめやかなり、
 ゆたかなり
 (2) あだなり、あらたなり、あからさまなり、いささかなり、うれしげなり、
 おいらかなり、おぼろげなり、おもはずなり、ぎやうぎやうなり、きたなげなり、
 くるはしげなり、けうなり、こころぐるしげなり、すみやかなり、そぞろなり、
 たのもしげなり、なごやかなり、なのめなり、なめらかなり、はかなげなり、

ひそかなり、ひややかなり、ふくらかなり、ふさやかなり、ふびんなり、
ほそやかなり、みそかなり、むげなり、ものきよげなり、ものこころぼそげなり、
やはらかなり

- 《1》 あえかなり、あしげなり、あつらかなり、あてはかなり、あはただしげなり、
あまりなり、あきらかなり、あやしげなり、あやうげなり、あららかなり、
あをやかなり、いかやうなり、いたげなり、いみじげなり、いやたかなり、
いやとほなり、いんぐわなり、うちつけなり、うらやましげなり、うららかなり、
おくびやうなり、おとなしやかなり、おもげなり、おもひがほなり、おもりかなり、
かいしのびやかなり、かたほなり、かたなりなり、かれがれなり、かろらかなり、
きなり(奇)、きはやかなり、きびはなり、きゆうなり、すみぐるなり、
けうとげなり、けうらなり、けそうなり、こころあわただしげなり、
こころうげなり、こころそらなり、こころしづかなり、こころのどかなり、
こころもとげなり、このましげなり、こわだかなり、さだかなり、さとがちなり、
さむげなり、さややかなり、したりがほなり、しふげなり、しりがほなり、
しろらかなり、すぎすぎなり、すどげなり、すなほなり、せちなり、
そむきざまなり、ただなり、たどたどしげなり、たへがたげなり、たまさかなり、
たゆげなり、つつましげなり、つばらなり、つややかなり、なげなり、
なずらひなり、なだらかなり、なほざりなり、なよらかなり、なんとなげなり、
にくげなり、にほひやかなり、はつかなり、ひたぶるなり、ひとかたなり、
ひまなげなり、ひらなり、ふさうおうなり、ほうぞくなり、ふしぎなり、
ほかざまなり、ほこりかなり、まさざまなり、まどほなり、まめなり、
まゆぐるなり、みごとなり、みすぼらしげなり、みじかなり、みやびやかなり、
むくつけげなり、むづかしげなり、めもあやなり、ものあらはなり、
ものうげなり、ものおもひがほなり、ものなげかしげなり、ものうげなり、
やすげなり、ゆかしげなり、よしありげなり、よそほしげなり、りよがいなり、
わざとなり、わづらはしげなり、をきなげなり

(熊本県立済々黉高等学校)